チューリッヒ日本人学校

～ スイスの文化と日本人学校の子どもたち～

教諭　河本　良子

スイスの文化と日本人学校の子どもたち様子について

＊＊はじめに＊＊

スイス連邦（スイスれんぽう）、通称スイスは、永世中立国、直接民主主義制度をとるのヨーロッパの連邦制共和国です。ドイツ、フランス、イタリア、オーストリア、リヒテンシュタインに囲まれた内陸に位置する日本の九州の大きさぐらいの面積の国です。国内には、ＵＮＣＨＲ（国連難民高等弁務官事務所）をはじめ国際連合ヨーロッパ本部やＷＨＯなど多くの国際機関が置かれています。（今年度の夏休みは校内研修でＵＮＣＨＲで働く日本人スタッフから話を伺うこともできました。）永世中立国であると同時に国民皆兵国家ですので、チューリッヒにでると兵役をおえて家に帰る若い軍服をきた男性を見かけることが多く、驚きました。。

首都はベルンでこの名前の意味はドイツ語で「熊」の意味。主要都市は、チューリッヒ、バーゼル、ジュネーヴ、ローザンヌで、私たちの学校はチューリッヒ州内にある第二の都市ＵＳＴＥＲ（ウスター）にあります。生徒数は現在 20 名で、4 月当初（14 人）に比べて増えています。スイスの公用語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語と四つの言語がありますが、本校ではチューリッヒ州をはじめスイスの７０％の人々が使用しているドイツ語を週に２時間、現地採用の先生から学んでいます。

☆☆チューリッヒの春を告げる祭りゼクセロイテン☆☆　（↓５月に参加したゼクセロイテンの様子）

ゼクセロイテンは復活祭後の日曜と月曜に行われる商業都市チューリッヒの春祭りです。日曜日には、スイスの子どもたちと一緒にチューリッヒに住む世界中の子どもたちが、それぞれの民族衣装を身にまとって大通りをパレードします。チューリッヒ日本人学校の児童・生徒は法被姿で和太鼓を敲きながら行進します。

翌日は大人のパレードで、大勢の人が、この伝統的な仮装行列に参加します。主人公は、白い紙に包まれ、麦わら帽子をかぶりパイプをくわえ、左手に逆さに立てたほうきを抱えた「ベーク」と呼ばれる身長3メートルの人形です。冬将軍の「ベーク」は、ゼクセロイテン広場に置かれたたきぎの小山の上に立っています。行列を終えた騎士達はその周りをぐるぐると駆け回ります。大観衆の見守る中、午後6時の鐘を合図に土台のたきぎに火が付けられます。人形はわらと紙でできていますし、火薬が仕掛けられていますので、勢いよく燃えます。頭の中に入っている最後の火薬が爆発すると見物人達は歓声を上げます。焼かれた人形は冬を象徴する雪男です。火を付けてから、頭の中の火薬が爆発するまでの時間の長短によって、その年の夏が暖かいか、寒いかということを占います。だいたい10分前後だそうですが、その1秒を競って観衆は見守ります。

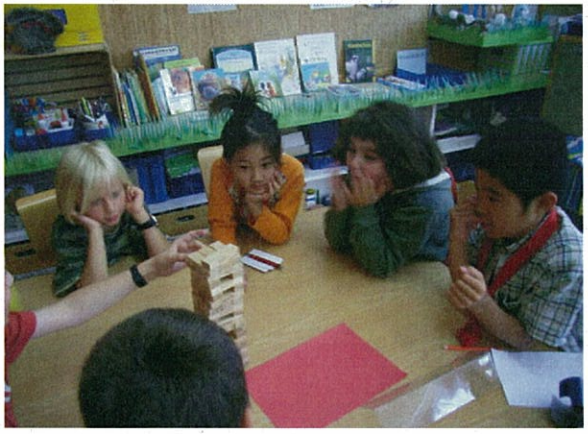
（↓　先頭はスイス人御者さんです。）

（　↑沿道の人に日本の旗を渡すと大喜びでした。）

昔、チューリッヒではギルドと呼ばれる同じ職業の人たちの集まりがありました。その人たちが、チューリッヒの町のしくみを決めていったのです。ゼクセロイテン（Sechselauten「6時の晩鐘」の意味のお祭り）も14世紀にギルドの人たちが始めたお祭りです。日が長くなる季節の職場の終業時刻を冬場の5時から6時に切り替えた知らせの鐘のなごりです。お祭りは人々の生活と密着しているものです。ここに住む人々にとって雪に閉ざされた長い冬は辛いものでしょう。いかに暖かい春の到来を待ち望んでいるかということがわかります。

☆☆現地校との交流☆☆

わたしの担任するクラスは３・４年生クラスです。四月当初は、3 年女子 1 名と４年男子２名の計 3 名の複式学級でしたが、夏休み前に３年生女子児童が日本に帰国し、2 学期に 4 年生女子が 1 名日本から編入してきたので現在は 4 年生 3 名のクラスです。３・４年生と 1 年生のクラスが合同で６月にスイスの現地校と交流をしました。1 回目の交流はこちらから現地校を訪ね、現地の小学３年生と、ゲームをしたり、かけっこをしたり、こちらならではの「おやつ休憩」を体験したりするという交流でした。



（↑６月の現地校との交流の様子　）

第２回目の交流は１２月１２日に計画していて、今度は現地校の子どもたちを日本人学校に招待します。まず、日本の遊び（あやとり・折り紙・剣玉・ぼうずめくり）を紹介して、4 年生が形からできた漢字（象形文字）をスイスの子どもたちにドイツ語で教えるという計画で進めています。今はその準備に大忙しです。「どのように教えればわかりやすいのか。」「楽しく学んでもらうための工夫はどうすればよいか。」と子どもたちは頭を悩ませています。また次回の報告ではその時の様子をくわしくお伝えできればと思います。